令和元年１１月定例教育委員会

開催日時　令和元年１１月２０日（水）
午前１０時～午後０時

１　開会
○山本教育長
ただいまから令和元年１１月定例教育委員会を開催します。よろしくお願いします。

２　日程説明
○山本教育長
それでは最初に、教育総務課長から本日の日程説明をお願いします。

○片山教育総務課長
本日は議案１件、報告事項７件の合計８件です。ご審議よろしくお願いします。

３　一般報告
○山本教育長
それでは、私から一般報告をいたします。今月は、各種大会や、周年行事が多くありまして、それらに出席してまいりましたし、委員方にもそれぞれご出席、ご参加いただき、感謝申し上げたいと思います。主だったところだけを申し上げますと、１０月２８日に、これは毎年恒例で年２回、県・市町村の行政連絡協議会を行っておりまして、来年度予算に向けて、検討中の施策等について概要を説明して、意見交換を行うなどしたところです。また、教職員の働き方改革でありますとか、学力向上策、また不登校支援の取組などを中心に、しっかり意見交換を行ったところで、こうしたところで出てきた意見を施策に反映するとともに、より連携してスピード感を持って対応できるように出来ればと考えております。また、併せてこの７月の組織改正で、子育て・人財局が知事部局にできたというお話をしたと思うんですけども、様々な子育て施策、あるいは私学の関係、そしてまた関係深い総合教育会議の主幹局でもありますが、そうしたことができたことをきっかけに、少し市町村の首長方にも、その辺りの県の考え方だとか、そういうものを説明して、今後、首長を交えて教育についての意見交換をするということについて、どうだろうかということを今一緒になって、各市町村を回っております。そうした中で総合教育会議の持ち方でありますとか、あるいは学力向上についても、これは学校現場だけの話ではなくて、当然家庭なども含めた総合力の部分がありますので、首長方にも関心を持っていただきたいことなど、意見交換をして回っているところです。また、そうした中で様々な意見が出てくれば、そうしたものも施策等に反映していければと思っています。

また、１１月１日に、来年度から始まる高大接続の新しい大学入学共通テスト、導入されることになっていた英語の民間試験が、色々ありまして突然、延期表明がなされたということで、これに伴う対応について、学校現場への連絡や、その後の対応についての指導など、そうしたことで少しばたつきましたが、学校現場は比較的冷静に受けとめているところで、一部、混乱もあったわけですが、これを受けて改めて、１１月１１日に文部科学省に出向き、今後大学入学共通テストが実施されるわけですが、生徒や保護者あるいは学校現場に、混乱と不安を生じさせないように、しっかりと国で万全な準備を行ってほしいということや、事前に十分な情報提供を行ってほしいという要望をして参ったところです。

１１月１３日に、小中学校の校長の合同意見交換会を実施しました。義務教育現場の管理職と直接意見交換ができる、数少ない機会ということで、現場的には、やはり大量退職時代を迎えて、教員が若返っている。しかもその人材が代員も含めてしっかり確保できていないというご意見をいただきました。定数的には色々な施策を打ってもらっているんだけれども、そこについての人材の確保というものが随分、課題になっているということで、採用試験の在り方などについても、ここでも議論がされておりますが、そうしたことについての改善、あるいは働き方改革の中で、部活動をどうしていくかということについて、学校からも提言いただきましたし、そうしたことについてこれからもしっかりと考えてまいりたいと思っています。

１１月１４日には、鳥取湖陵高校の生徒が訪ねてきてくれました。これは「JGAP（ジェイギャップ）」という新しい認証の制度ですが、食の安全でありますとか、あるいは環境保全の教育、そうしたものにも絡んでくるわけですが、生産から出荷まで一貫して管理していくということで、この度は、ハウスのトマトということで、この JGAP というものの認証を得たわけですが、これが実は、オリンピックなどにも関わっておりまして、オリンピックの選手村で提供する食材は、このGAPという認証を得たものでないといけないということで、とりあえず、そこの要件をクリアしていまして、あとは採用に向けて、これから取組んでいくということでありますとか、鳥取県はジャマイカがキャンプ地になっていますので、ぜひジャマイカの選手たちにも、このトマトを味わってもらいたいということで、色々計画しているようです。この他にも、高校生を含めて、子ども達が活躍する場面が増えてきているなと思っておりまして、こうしたところをしっかりと支援するということを進めてまいりたいと思っております。私からは以上です。

４　議事

〇山本教育長

続いて、議事に入ります。本日の議事録署名委員は、若原委員と佐藤委員にお願いします。まず、森田次長から、議案の概要説明をお願いします。

○森田次長
　議案第１号「鳥取県教育職員の免許状の授与等に関する規則の一部改正」について、教育職員免許法の一部が改正されたことに伴い、所要の改正を行うものです。

（１）議案
○山本教育長
　それでは、議案第１号について、担当課長から説明してください。

【議案第１号】鳥取県教育職員の免許状の授与等に関する規則の一部改正について（公開）
○中田参事監兼小中学校課長
　成年被後見人等の権利の制限に係る措置の適正化等を図るための関係法律の整備に関する法律が、６月に一部改正されました。それにより、教育職員免許法の一部改正があり、「成年被後見人等が免許状を授与されない」とする規定が削除されました。免許申請時の提出書類の一つとして宣誓書を出すこととなっておりますが、改正に伴って宣誓書からその条項を削除するということで、今回お諮りするものです。

○山本教育長
　それでは、ただいまの説明について、委員方から質問あるいはご意見等お願いします。形式的なものではございますが、いかがでしょうか。

○中島委員
　これは被後見人や被保佐人だと、今まではできなかったけれども、これからは、そうであっても大丈夫になったということなんですよね。

○中田参事監兼小中学校課長
　それは、被後見人制度に入っておられる方については、一律でできないということになっていましたが、それを今回の改正で、その制度に入っておられても、個別に審査して、判断していこうということになります。障害者差別解消法等々も取り上げられていますので、一律に排除するのではなくて、個別に対応ということで法律の改正に伴うものです。

○山本教育長
　その他、いかがですか。よろしいでしょうか。（同意の声）では、議案第１号については、特に異論はないようですので、原案のとおり決定したいと思います。

（２）報告事項

○山本教育長

続いて報告事項に移ります。初めに事務局から順次、説明し、その後、各委員からの質疑をお願いしたいと思います。まず、報告事項ア～ウについて、説明してください。

【報告事項ア】琴の浦高等特別支援学校におけるフォークリフト資格取得の取組について

○山本特別支援教育課長

フォークリフトの資格取得について、今回初めて取り組んだものです。１トン未満のフォークリフトについて、２日間の研修と実技を行いました。１０名の生徒が参加しまして、資料に写真がありますが、実際にフォークリフトに乗って、動かしたりしたというところです。生徒も非常に興味があって熱心に行ったと聞いております。１０名受けまして１０名とも合格だったと、報告を受けています。生徒は大変熱心に行いましたので、今後とも取り組んでいきたいと思っております。以上です。

【報告事項イ】令和２年度鳥取県立高等学校入学者選抜実施要項について

○酒井高等学校課長

令和２年度の入試は、推薦入試、これが令和２年２月７日、一般入試が３月５日木曜日に筆記試験、面接等は６日金曜日ということです。追試験が３月１１日水曜日、これは各高校で行うことにしております。合格発表が３月１６日。再募集は３月２５日水曜日ということになっています。

主な変更点は、この後、述べたいと思います。入試要項については、東・中・西部三地区で、中学校教員、高校教員等を集めて、それぞれ詳細な説明会を開催したところです。

入試要項の変更点について、簡単に説明させていただきます。まず、１番の調査書について、義務教育学校に対応するために、今まで選択教科というところがありましたが、選択教科等というので、等を付けました。これは、義務教育学校には特別な教育課程で実施する教科というものがありまして、その教科に対応するものです。具体的には、コミュニケーションというような科目を設置しているということです。２番から３番までは、志願書の記載を揃えるためとか、より分かりやすくするためとか、実態に合わせるためということで、簡単な変更を行っております。６番目に、推薦入試・一般入試で、性別欄をなくしました。昨年までは推薦入試の志願書は、氏名の一番右端に性別の欄を付けておりました。昨年、大阪府と福岡県が性別の欄を廃止しまして、この流れが全国的にも加速しており、中国地方でもすべての県で、ここは廃止するということになっていまして、鳥取県も合わせて廃止します。理由は、性別を記入することに抵抗感を持つ生徒が今、増えつつあるということに配慮したものです。なお、ここで性別欄をなくしても、調査書に残っておりますので、特に学校が困るということはありません。これは色々と目に触れるものですので、そういうところで配慮を行ったということです。

項目７、推薦入試志願書記載上の注意事項で、今まで書いておりませんで、口頭では言っていたのですけども、やはり中学校教員から「きちんと記載してほしい」ということで、黒色のボールペンで志願書は書いて、訂正する場合は二重線を引いて訂正印を押すことという、今までは口頭で説明していた部分を記載しました。今、フリクションという消せるペン、これで書く生徒が多くいるようでして、「これはいけませんよ」ということで、ボールペンという表記にしております。８番、９番は、より分かりやすくするために変えたものです。

１０番目、再募集入試について、要項７０ページをご覧ください。再募集入学志願者数等報告書ですが、一番右端に県外志願者を書く欄を設けました。以前は、再募集で県外からの生徒は想定していなかったのですが、最近少しずつですけど、県外から再募集で向かってくる生徒が出てきていましたので、これに対応したものです。

最後に１１番、配慮事項についてです。配慮事項を出すときに、学校長の所見欄がありますが、学校長の所見欄の横に、中学校で行っている配慮事項を記入します。これも常に口頭では説明してはおりましたが、そこの説明がうまく伝わらないことがあり、こちらからも聞き取ったりするのですが、中学校からもここの説明をきちんと書いてもらえると、きちんと配慮事項が書けるということで、言葉を追加しました。

【報告事項ウ】中学校トークプログラム「ＣＨＡ３（チャチャチャ）プログラム」の実施結果について

〇島田社会教育課長

実施結果についてですが、このプログラムは、６月補正で、「ふるさとキャリア教育推進事業」ということで、予算が付いた中で実施させていただいているものです。この事業で行った３件が終了しましたので、その内容について、まとめて報告させていただきます。

事業の趣旨・目的ですが、地域の大人と大学生、中学生がグループになって、働き方であるとか、生き方などのテーマについて話し合うことで、中学生が自分たちの地域の大人の色々な価値感を知ったり、地域社会への関心を高めて、少し先の目標を考えることができるようになるということ、逆に地域の大人の方や大学生が中学生と語り合う機会を通して、学校や子どもたちに対する興味・関心を高めるということを目的としておりまして、下に囲みがありますけれども、チャチャチャという名前のいわれとして、地域の方や大学生と出会う機会の Chance と、多様な価値観と出会って自分を変えるの Change と、様々なことに挑戦する態度を養うの Challenge という、三つのチャを取って、チャチャチャプログラムと名付けたものです。

具体的に、２でプログラムの概要について書いておりますが、７名から８名程度が輪になったグループをつくり、その中に中学生・大人・大学生が入って、自己紹介をした後、司会が一つテーマを提示します。下に例が書いてありますが、例えば「働くってどんなこ

と」とか、「どんな大人になりたいか」とか、最後のほうのテーマで、もう少し軽いテーマも沢山入れているんですけども、最後のほうに、こういったことに気づくように、テーマを六つ程度提示しております。それを手元の紙に答えを全員が書きまして、それを一斉にオープンして、「これは面白い意見だね」とか、「それってどういうこと」とか、お互いにそれぞれの紙の内容について語り合う約２時間のプログラムで、前半後半でメンバーを入れ替えてというやり方で実施しております。大学生が入っていますが、大学生はグループ内のファシリテータとして対話を盛り上げて話を振ったり、積構的に意見を引き出すという役割を担っていただくこととしておりまして、併せて中学生に近い存在の先輩として、自分の経験や考えを話すという役割として入っていただいています。

実施状況ですが、この「ふるさとキャリア教育推進事業」として実施しましたのは、東・中・西部一校ずつで、９月１７日に米子市立美保中学校で、１０月２１日に琴浦町立赤碕中学校で、１１月１２日に鳥取市立千代南中学校で実施いたしました。下に注がありますけれども、西部地区において、島根大学との連携事業ということで、この事業とは別口という整理にはなっておりますが、同様のプログラムを３件、別途実施していることを補足させていただきます。

実施結果ですが、今ここに掲げております東・中・西部一校ずつのものをアンケートしております。それを集計した内容をここに記載しておりまして、すべての項目において、プログラム実施前後の肯定的回答が、実施前を上回っておりまして、これまで学力学習状況調査の質問紙などで、特に鳥取県の子どもたちに課題があると言われてきていた自己肯定感であるとか、将来の夢や目標、地域に対する愛着、貢献意識の向上という効果が見られたということで、実際のアンケート欄を見ていただければと思います。かいつまんで説明いたしますと、上から四つ目のところ、自己肯定感「私にはよいところがある」というところですけれども、左から二つが、「とてもそう思う」とか「そう思う」となっておりますけれども、これが合計５４．１％が７５．４％ということで、２０ポイント以上上昇しておりますけれども、特に見ていただきたいのが「とてもそう思う」のところが倍以上になっているというところです。四つ下がっていただきまして、「将来の夢や目標」ということにつながる「将来に希望を持てる」というところも、肯定的見解でいうと２５％以上上昇しておりまして、これも「とてもそう思う」が倍以上ということでございまして、その下につきましても２０％以上肯定的回答の上昇が見られるということです。下二つですが、これも学力学習状況調査と同様の項目になっておりますが、「地域で起こっている問題や出来事に関心がある」というところも２１．６％増加、「とてもそう思う」が倍以上でして、そして一番課題があると言われていた「地域をよりよくするために何をすべきか考えたいと思う」というところも上昇１５．０％ですけれども、「とてもそう思う」については３倍ぐらい増えているということでして、これまで課題とされていたことに、効果的にアプローチできるプログラムではないかなと思っております。たくさん感想を挙げておりますけれども、非常に生徒・地域の大人・大学生ともに、その書き方が熱心でして、特に

こういうプログラムは「やらされ感」がある場合が多いんじゃないかと思うのですが、子どもたちの感想の中で、「楽しかった」、それから「またやりたい」、「もう一回やりたい」というのがたくさん書かれていたというのは、「書かされた」とか、「やらされた」という意識とは少し違うところが見られて嬉しかったところです。一番上のところの感想などは、端的に表していると思うんですけれども、「最初はとても緊張したが、どんどん楽しくなって、他の人の意見を聞きたい、自分も話したい、と思えるようになった。これからも地域のこと、自分のことについて、どんどん人と話していきたい。」ということが書かれています。その下も「初めて、人と関わることがこんなに楽しいのだと知りました。」その下は「大人にも夢や目標があることを知った」これもなかなか中学生はそういうことを思っていないんだなと思いましたけれども、「大人になっても夢や目標があることがわかって、自分の夢に向かって頑張りたいと思った。」その下の二つですと、「大人になるのが楽しみになった。今後は地域の方と積極的に話をしていきたい。」とか、「自分の地域や将来について楽しく詳しく話すことができて、よい経験で、もう一回したい。」とか、その下が嬉しかったんですが、「人前に出るのが自分は苦手に思ったりするが、このプログラムで、自分らしくていいんだと思えた。前向きにしてくれるプログラムだと思った。」一番下ですけども、「自分の意見を堂々と言えたので自信を持ちたい。すばらしい体験をありがとうございました。また、やってみたいです。」と書いていただきまして、厳選したもので嬉しい意見をたくさん書いていただいたところです。

地域の大人・大学生ですが、アンケートに回答した全員が、プログラムについては「よかった」と評価いただきまして、ほとんどの方が「また参加したい」と回答いただきました。地域の方にとっても、普段接する機会の少ない中学生と話すことで、学校や生徒に対する関心を高める機会になり、大学生も含め一体感と相互の学びにつながったのではないかと思っております。大人の感想、大学生の感想をかいつまみますが、大人の感想では一番下の「普段、中学生と接する機会がないので、考えていることや、雰囲気がみられてよかった。とてもよい機会だった。ぜひ毎年開催してほしい。」という意見もたくさんありました。大学生の感想は、上から三つ目のところ、無記名ですのでおそらくということで言いますと、「自分は、中学生時代に不登校経験がある」と言われていた方だと思うのですが、その方がプログラムの中で、そういう話をしていたということで、「自分が中学生のときにも、こういう機会があればよかった」と言っていただいたということです。それから一番下ですけども、「自分自身もとても楽しめて、この気持ちを忘れずに、地域社会のために働ける大人になりたい」と書いた大学生もいました。

今後の方向性ですが、市町村教育委員会や学校、それから地域の方々のアンケートに「ぜひプログラムを継続してほしい、実施したい」という声がありますので、次年度、実施校数を増やせたらということで今、予算要求の最中です。先日の千代南中学校の様子は日本海新聞の記事になっておりますので、またご覧いただければと思います。

○山本教育長
　ただいままでの説明について、委員方からご質問等ありましたらお願いします。

○鱸委員
　一番最後の報告事項についてですが、大学生のファシリテータ役は、どういう選び方で、どうお願いしたのでしょうか。全部の子どもたちの気持ちの変化が、非常にすべてにわたって上がっているのですが、どういう方ですか。

○島田社会教育課長
　まず大学生ですが、西部と東中部では少し集め方を変えておりまして、西部は島根大学教育学部の学生に対して、島根大学には鳥取県から行っている教員がおりますので、その方と話をしながら、教育学部のほうから出していただきました。それから、東中部に対しましては、教育学部がありませんので、鳥取大学をベースとした学生人材バンクというものがありますが、そこと委託契約を結びまして、その中で鳥取大学と鳥取環境大学と、それから少し鳥取短期大学にも声をかけながら募集をかけ、募集をしただけでは、学生の中にこのプログラムが落とし込めないので、実際は事前に大学生を集めたガイダンスということで、「これはこういう趣旨のプログラムで、大学生の役割はこういうことで、こういうことに注意してほしい」ということで落とし込んでいます。ただ、無料のプログラムでボランティアですので、謝金を払っていないということもあって、こういうことをやってみたいという方でないと、なかなか来ないというところもありますので、集まった大学生は比較的熱心な、こういったことに意識のある方です。

○中島委員
　今のチャチャチャなんですけど、これは本年度はあと何回、来年度は何回ぐらいというのはあるんですか。

○島田社会教育課長
　今年度ですが、実施状況のところを見ていただければ、この６月補正で予算が付いたのは３件だけでして、東中西部で一校ずつです。下に少し書いたのは、西部地区で「やりたい」という声が多くありまして、島根大学と連携して行うということで、更に３件、実際には実施しておりまして、あと１件を伯耆町立溝口中学校で今年度２月に予定しているのが最後のプログラムになります。来年度は１０校で予算要求しておりますが、まだ査定が進んでおりませんので、どういう状況で、どういう反応が返ってくるかまだ分からないところです。１０校ぐらいでできたらと、各市町村とも話をしながら、「ここの学校が希望している」というお話をもらいながら調整していますが、実際には予算がどうなるか分か

らないのが現状です。

○中島委員
　これは何にお金がかかるんですか。

○島田社会教育課長
　大学生を募集して集めて、チラシもありますが、現地までバスで移動するバス代も案外高いです。今、予算要求しているのが、１０校で２６０万円ぐらいで、一校当たり数十万です。バスでなくても、大学生の旅費ですね。謝金は払わないですが、持ち出しはさせられないので、交通費と集めたりする経費にお金がかかります。

○中島委員
　とてもいい事業だなと思います。この人数構成で少し不思議な感じがするのは、例えば西部だと、中学生が５３人に対して、大人や大学生も５３人という同じ数で、中部では４７人だから、大人・大学生のほうが多いぐらいの感じになっていて、これはもちろん、大人の方とか、大学生の方が増えること自体はいいのだと思いますが、通常のファシリテーションの考え方等でいけば、大人から話を聞くということでいけば、例えば、子ども５・６人に対して大人一人か二人、ファシリテータが一人というような感じで考えていけば、そこのところのコストダウンという部分は図れるんじゃないかなと思うんですけど、ここまで大学生を増やした意味というのは、何かあるんですか。

○島田社会教育課長
　元々の考えている構成が、大体８人グループで、４の子どもに対して、大人２・大学生２というところをベースに考えながらやってきました。大学生の数に関しては、大学生と大人という力関係では、その場に入った時になかなか一人ではファシリテートしにくいという話がありまして、半々くらいの数が一番、もちろん大人が多すぎては中学生が話をできないですし、できるだけ多様な大人の価値観を知ってほしいということからすると、ある程度の人数がほしいというところのバランスを考えたときに、一番いいバランスということで、一人の大人から話を聞くのではなくて、「ああ、こういう価値観もこんな価値観もあって、大学生はこんなふうに考えているんだな」という、お互いに語り合うと思った時、誰かが教えるのではなくて、語り合うんだと考えた時には、子どもとそれ以外の者は同数ぐらいがよいのではないか、という感じで考えられているプログラムです。

○中島委員
　そうすると、これは必要数として、これぐらいの人数になったということですか。例えば、大学生２９名や１５名などは。

○島田社会教育課長
　理想は西部です。逆にいうと東部や中部は、大学生を集めきれていなくて、実際には大人の中に、少し若い世代で、その方たちにはこちらから趣旨を事前に伝えて、ファシリテートも担ってねということを少し伝えてあります。大学生ではないんだけれども、純粋に地域の大人でもないという方を少し混ぜ込んでいたりして、そうした意味で少し地域の大人が増えていますが、理想の数としては西部くらい。少し大学生が多いですが、大人と大学生が同じぐらい、中学生と地域の大人・大学生が同じぐらいを目指したいと考えているところです。

○中島委員
　これは、学生は単位になるのですか。授業として出してもらっているのですか。

○島田社会教育課長
　授業外になります。そこがなかなかやはり出られないところでして、島根大学は、単位というわけではないのですが、千時間体験プログラムということで、単位に近いようなものだと思うんですけども、学校の中で「それはしないといけないよ」という千時間の体験の中に入れ込むことで、最終的に単位の一部と考えられるプログラムの中で出てきているので、出やすいんですけども、鳥取大学や鳥取環境大学については、純粋にボランティアとして出てきていて、単位というわけではないです。

○中島委員
　この辺りのことが、鳥取大学と県教委との連携の中で、単位化するみたいなことになると、実は我々も表現ワークショップのサポートをしてくれる学生をという時に、当然、昼間になるので、「授業があるんですよね」という話になってしまって、学生を集められないんですよね。それから、大学としても、ある程度、これだけの地域への、学校現場への出るボリュームがあるんだということが、ボリューム感が示せれば、スポットじゃなくて、これだけあるんですよということでいければ、単位化するということも、考えやすくなるんじゃないかなと思うんですよね。

○島田社会教育課長
　一回、今年度少し話しはしてみたんですけども、もう一度、話はしてみたいとは思っているところです。

○中島委員
　実際、学生にもいいですもんね。

○島田社会教育課長
　はい、学生も非常に反応もよくて。勉強になって、あわよくば鳥取に残りたいという気持ちにもなってもらえればなということもあるんですけども、そうでなくても勉強にはなると思います。

○中島委員
　できるだけローコスト化していって、数を増やしていくとかできれば、そのほうがいいですよね。

○島田社会教育課長
　年間でいうと１０件ぐらいが色々な意味では限界かなとは思っています。あまり２０も３０も抱えられないかなと。

○中島委員
　それは事務局が大変になるのですか。

○島田社会教育課長
　事務局もですが、学生もそうはいっても数から考えて２０回も３０回も出てこられないだろうなと。島根大学も年５回ぐらいが限界かなという教育学部の話もあるようでして、年間でいうとじゃあ全部の学校でやりましょうとか、全部の学校が希望するわけでもないですし、全部の学校でやりましょうということはこちらも対応ができないですし、学校の側も全部が全部やりたいというわけではないですし、自分たちのところではこういったことをやっているのでいいですよということもたくさんあると思いますので、一つの手段としてこういったものがありますよという提案かなと。

○中島委員
　また色々と蓄積していただいて、より洗練されたやり方というか。

○島田社会教育課長
　学生のところは工夫しながら、と考えているところです。ありがとうございます。

○佐伯委員
　地域の大人というのは、中学校のある校区の方に声をかけるんですか。

○島田社会教育課長

そこを原則にしていまして、実は学校に唯一お願いしているのはこのことで、学校で関わりがあるところ、集められるところを原則集めてくださいねということで、「子どもの数の半分ですよ」というと、定員はなかなか集まらなくて、「では少し広げてこちらからも声をかけてみますね」とか、市町村教育委員会でも少し入って集めてくれたりしますが、基本は学校が声をかけて集めてくださいねとお願いしております。

○佐伯委員

高等専門学校の学生の方には、今回は声をかけていませんか。高等専門学校も結構いいのではないでしょうか。色々と地域に出てきてくれる学生さんが、小学校の出前講座なども来てくれたりします。ロボットなどもちょうど子ども達は興味があるので。

○島田社会教育課長

はい、そうですね。ありがとうございます。

○鱸委員

琴の浦のフォークリフトの件についてお話を聞きたいのですが、講師をコマツ山陰米子支店にしていただき、初めての経験に関して資格を取得するというすごく素晴らしい取組ですけども、まったくこの子ども達は、フォークリフトの経験はないんですか。

○山本特別支援教育課長

これまでまったくありませんでしたけれども、非常にやってみたいという生徒が実は多かったということで。

○鱸委員

この子ども達は、どういうお子さんですか。いわゆる知的障がいのほうが強いのか、情緒面、あるいは発達障がい関係なのか。

○山本特別支援教育課長

どちらかというと発達障がいのこだわりの強い子ども達だと思っています。６時間、実技を行いましたが、６時間のうち十分の一の時間しか乗れないわけで、あとの９人は乗れないのですが、全員が傍らに付いて６時間ずっと立って見ていたということです。

○鱸委員

すごい集中力だったと思うので、これを考えると、いわゆるコミュニケーションは別として、業者の方のご意見などはどうなのでしょうか。

○山本特別支援教育課長
　業者の方も最初は、そんなに合格しないだろうと思っていたんですけども、全員合格だということでびっくりされていました。

○鱸委員
　そこに、特別支援教育の基があるように思うんですね。今後、知的のいわゆる社会的自立を目指す琴の浦に、こういった子ども達がおるとすれば、なかなか知的に困難な子どもは行けないというか。全体にどういう感じなんでしょうね。いわゆる、情緒面が主とか、あるいは学習障がい的なところが主とかになってくると、知的とは少しずれてくるのでは。

○山本特別支援教育課長
　今回、志願を先週に締め切りまして、４０名に対して４８名志願がありました。過去最高でしたが、学校関係者から話を聞いてみますと、琴の浦は最初、県内に知的障がい３校ありますが、知的障がいのレベルの高い子ども達を集めてやるんだということで設立したところですが、どうも今、倍率１．２ぐらいありまして、８人落ちるので、なかなか知的障がいの子ども達が向かってきても、情緒障がいや発達障がいの子ども達が中心になって合格するので、変わってきているんじゃないかという、これまだ詳しく調べてみないと分からないですが、話は少し出てきています。

○鱸委員
　だから、知的とか情緒とか、学習とかいうところが、ひとまとまりにして子どもたちを教育の場の中で指導するということを、少し見直してもいいのかなと思ったんですね。
　今、ある市町村の就学支援に出ているのですが、情緒というところと、知的というところが非常に曖昧なんですね。それから、情緒の中にも色々な子ども達がいるわけですね。ＡＤＨＤや、最も情緒のおとなしい子どももいるわけで、その子ども達が一つの特別支援学級で教育を受けるということ自身が、初めから分類というか、そういう中で就学指導の意見交換がなされているということに、その場で少し言わせてもらいましたが、「この会は子どもを差別していくという会ではけっしてなくて、最適化を目指すことを考えないといけないんじゃないですか。」と。まずＩＱの説明があって、この子どもの困りはここですということになるので、初めにＩＱがきたら、知的障がいかどうかというところに目がいってしまうので、それはおかしいのではないかということを言ったことがありまして、今これを見ると、琴の浦にいくまでの幼児から小学校というところの、特別支援学級の考え方も少し考えていけば、こういう自立した社会性の対応の仕方によって、いわゆる合理的配慮によって、社会で自立する子どもが出来てくるのはいいことだなと思います。
　少し色々言いましたけれど、この成果を見ていると、これは興味がないと普通の大人でもなかなか取れないんじゃないかと思います。ですから、やろうとして目的意識を持った

子どもが、情緒的なところ、ＩＱも少しは困難さがあるのかもしれませんが、こうやって資格を取っていくということは、非常に意味のあることじゃないかなと思いました。これはもっと特別支援教育課で、少し練ってみられて、もっと落とし込んでいけばいいのかなという感じがします。

○佐伯委員
　このフォークリフトの資格を、やってみようと思われたきっかけは何だったんですか。

○山本特別支援教育課長
　琴の浦の卒業生が、農業や外食産業、会社、あとはバックヤードに入りまして、フォークリフトを使う機会があると聞きまして、生徒は興味がありそうだから、合格したら自信もつくだろうし、やってみようかということです。やってみたら、ものすごく生徒の食いつきがよかったという状況です。

○佐伯委員
　これは、資格を取ると、やはり就職には有利になるというか、広がりますか。

○山本特別支援教育課長
　広がります。資格を持っているということで。それも含めて少しこういったことをやってみようかということで、コマツさんにフォークリフト等を持ってきてもらい、行ったということです。

○佐伯委員
　色々な可能性が広がるというか、今回これをやられたので、また子どもたちの適性に合ったものが見つかれば、そういうことが広がっていけば、もっといいのかなと思いました。

○山本特別支援教育課長
　はい、また色々と考えていきたいと思います。

○中島委員
　もう課題意識はお持ちなんだろうなと思うのですけど、今後の琴の浦の選抜の在り方とか、そもそもの線引きの仕方等については、少し考えたほうがいいかなという認識です。

○山本特別支援教育課長
　考え方というか、職員の感覚ですので、そこら辺りはデータを見て、考えていかないといけないかなと思っています。

○中島委員

他の高校で、例えば発達障がいの子どもは琴の浦ではなくて、他で受けるみたいなことも連動して考えていかなきゃいけないということにもなってくるでしょうね。

○山本特別支援教育課長

あとでまた説明できたらと思っていますが、在り方検討の中で、色々と分析をかけていますけれども、他県に比べると、知的障がい児学級の子どもが高校に進学する割合は、実は鳥取県は高いです。それはどうしてかというと、高校でほとんど無資格というか、受験はありますが、定数が大きく割れていて、入れる高校があるので、そちらに行っている児童生徒も多いのではないかなという感じはしています。

○山本教育長

その他、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、残りの報告事項については、時間の都合により説明を省略することといたしますが、何かこれはということは、よろしいですか。（特になし）それでは、以上で報告事項を終わります。

その他、各委員方から何かございましたら、発言をお願いします。（特になし）

それでは、本日の定例教育委員会はこれで閉会します。次回は１２月２０日（金）午後１時から開催したいと思いますが、いかがでしょうか。（同意の声）

それでは、以上で、本日の日程を終了します。